

静岡県地域史研究会報

— 静岡県地域史研究会 —

戸田憲光の討死―松島論文に接して―

小林輝久彦

田原戸田氏当主の弾正忠憲光は、永正三年の駿河今川氏客将伊勢宗瑞の三河侵攻に際し、今川氏に接近して三河国渥美郡今橋城を入手した。続いて憲光は浜名氏の本貫地である浜名神戸一円の管理を今川氏親から委ねられ（静資7―四五四）代官斎藤を派遣した。しかし永正五年八月に浜名神戸内の北原山をめぐる大福寺との相論で敗訴し、続く十月に宗瑞の三河国での敗退を聞くことで今川氏を離反した。「宗長日記」によるとのち憲光は三河・遠江国境に位置する今川方の船形山城を落としたものの、今川氏配下の朝比奈泰以に奪還された。「宗長日記」は明確にしていけないが、「今川記」及び「今川家譜」は船形山で討ち取られたと記す。

この戸田憲光の討死の時期につき、最近松島周一氏は、大福寺文書の無年号の「善勝書状写」（静資7―四四七）にある「田原

（戸田憲光）が「今度就打死」つまりこのたび討死したと解釈し、さらに「善勝書状写」に「去々年」に大福寺の寺領につき「治部卿」が駿河に下り、福島助春を奏者として今川氏親から判物を受けた案件を、先述の北原山の相論に比定し、この相論が永正五年に決着していることから、「善勝書状写」の年代を永正七年とした。そして憲光は船形山で討死したとされるので、船形山合戦は永正七年に位置づけられるとする（『愛知県公文書館研究紀要』創刊号、二〇三年）。

筆者は船形山合戦を永正十四年に比定しているの、松島説について以下の疑問を呈しておきたい。まず信用できる「宗長日記」は、憲光が討死したとは記さない。これが正しければ、松島説は立論の前提が崩れる。次に討死を是としても、「善勝書状写」にある大福寺寺領の案件を永正五年八

月に落着した北原山の相論に比定してよいか、ということがある。大福寺文書によるとこの相論に大福寺代表として関与したのは「実相坊」であり（静7―四四二、四四三、四四九、四五〇、四五三）、駿河に下向したのも「実相坊」とみられ（静7―四五二）、いずれも「治部卿」ではない。したがって「去々年」に大福寺の寺領につき「治部卿」が駿河に下り、福島助春を奏者として、今川氏親から判物を受けたのは、北原山相論とは別の案件の可能性が否定できない。

第三に、このたび討死した者を「田原」とする解釈である。かかる解釈は既に弥永浩二氏が言及しているところであり（『駒沢大学史学論集』二八号、一九九八年。ただし弥永氏は「田原」を憲光の先代の宗光に比定し、討死も明応八年のこととする。）、文脈からしても自然な解釈とも考えられる。ただ筆者には「田原」も被申届候歟」と、続く「今度就打死」との間で文節がいったん途切れているようにも見受けられる。この場合、このたび討死した者の主語

例会全要目

四月例会

静岡市歴史博物館講座

四月二十八日(土) (十七名参加)

『東海の中世史』第一・二巻

廣田浩治・森田喬司

二〇二四年刊行の吉川弘文館

『東海の中世史』は、遠江・駿河

・伊豆を含む東海地域を、畿内近

国や東国との関係も踏まえながら

叙述した久々の通史である。今回

の書評は遠江・駿河・伊豆の論考

を対象にし、伊豆、東海全域や畿内

・東国との関係についても必要な

限りで論評を行った。『東海の中

世史1』は廣田が、『東海の中世

史3』は森田が書評を担当した。

『東海の中世史2』は廣田が序・

一・四を、森田がそれ以外を担当

した。

『東海の中世史1 東海地方の黎明

と鎌倉幕府』(生駒孝臣編)

東海地域を関東や畿内との関わり

で考える観点を示し(本書序)、

院政期から鎌倉幕府確立期までの

武士団と幕府の動向を論じる(本

書一・二・三)。次いで莊園制・

中世寺社・交通海運を論じる(本

書四・五・六)。『東海の中世史

2』以降に比べて、国ごとの叙述

よりも、東海地域の全体構造の叙

述に力点を置いている。特に鎌倉

幕府が東海地域の武士団やもとよ

り莊園制・寺社秩序・交通に大き

な影響を及ぼしたことが述べられ

ている。

東海地域の中心性や地域差につ

いては言及がないが、強いて言え

ば伊勢・尾張・美濃が比較的中心

的な地域と言えようか。しかし畿

内と関東にはさまれ、その影響を

受けた地域であるためか、東海に

は地域の中心性が希薄であるよう

に感じた。

冒頭の叙述(一・二・三)が源

氏平氏・幕府・武士団の叙述に特

化し、中世社会の基盤としての国

衙領・莊園制の形成過程が本書巻

頭で論じられないことに、最も強

い違和感がある。このため諸国の

在地領主を莊園公領制のなかで位

置づけることができなかった。東

海地域の莊園公領制研究の立ち遅

れのゆえである。また源氏平氏以

前の平安中期の内乱や群盜蜂起が

論じられないのも気になった。な

お源義朝家人鎌田正清の舅の尾張
長田庄司を駿河長田荘の領主と同
一人とするのは根拠がなく無理で
あろう。

幕府成立以後の叙述(二・三)

では、幕府や朝廷との関係の差異

により東海の武士に生じた格差の

指摘は重要である。静岡では伊豆

の武士が優位にあり、駿河・遠江

の武士とは大きな格差がある。た

だしこうした格差は東海地域だけ

で考えるのではなく、東海以外に

所領を与えられて進出した武士の

動向もふまえて考えるべきで、そ

の言及がなかった。何より北条氏

とその被官の勢力の東海と全国で

の拡大、御家人の北条氏被官化、

北条氏所領の拡大についての叙述

がなかったのは残念であった。

莊園制の叙述(四)はその多彩

な性格をうまくまとめているが、

遠江・駿河・伊豆については王家

領・国衙領・在地領主の職の言及

がみられなかった。また伊勢神宮

領には公家が給主である莊園や、

王家領から神宮領になった莊園が

あり、そうしたことを考えるため

の王家・公家・神宮など諸権門・

を「田原」ではなく代官の齋藤と

する解釈も成立するのではない

か。すなわち北原山内の寺領への

違乱を主導した首魁である憲光代

官の齋藤自身が討死したので、

「齋藤方」「おわら方」が大福寺

へ行き「きふく(帰服)」を申し

出たとする理解である。仮に代官

齋藤が存命ならば「齋藤方」と

「方」(仲間・関係人)という表

現をしないのではないだろうか。

この場合「善勝書状写」の年代比

定を松島説に従うと、代官齋藤が

討死したのは永正七年十一月以前

ということになる。当時天龍川以

西地域では大河内備中守が浜松荘

で蜂起し、その北方でも今川方の

堀江城が、大河内と共同する斯波

氏軍勢の攻勢に晒されていた時期

である(静7―五二四、五二

六)。この湖北方面の戦闘に代官

齋藤は、憲光の指示を受けて斯波

方として参戦して討死したのでは

ないだろうか。そうであれば「善

勝書状写」を船形山合戦と関係付

ける必要はなくなると考える。い

ずれの立場から、松島説の解釈

は弱いと言わざるを得ない。

都市領主の關係史は、本書では薄かった。

寺社の叙述(五)では後の駿河七観音の寺々が「国衙の寺」として論じられる。駿河国による寺院編成の指摘として重要である。交通海運の叙述(六)も多彩な交通のあり方を論じており、遠隔地交通(志摩・三河・駿河)とともに、交通ネットワークの本質が分節的であることを指摘する。分節的な交通は国衙の市などを中心にした面的な経済圏になり得るのか、またが分節的な交通が「線」でつながり遠隔地交通になる場合、その「線」に具体的にどのような施設・関係・システムが構築されるのか、さらなる課題になる。またここでも北条氏所領の拡大により交通ネットワークを受けたことが想定される。

『東海の中世史2 足利一門と動乱の東海』(谷口雄太編)

前巻とは異なり、国・地域別の政治史叙述と政治史以外の叙述で構成され、次巻以後も本書の構成を踏襲している。国単位の叙述は詳しくなっているが、東海地域全

体の政治秩序や経済・交通の叙述は薄くなっている。ただし南北朝内乱を扱う本書は、足利一門の全国展開や幕府の政治抗争史といった東海地域を超える叙述を盛り込んでいる。とはいえ前巻のような武家政権の東海道全体の支配編成、特に内乱期固有の重要な問題としての半済令や荘園政策立法などは言及すべきだったのではない。あと本書では伊豆についての内乱・政治史・支配構造の叙述がなかったも残念であった。

足利氏と三河の叙述(序・一)は、足利氏の基盤となった三河について、鎌倉期からの足利氏の展開、南北朝内乱での三河吉良氏の動向を描く。足利氏の東海道の拠点としての三河の重要性、足利一門守護の東海道諸国配置、吉良氏の遠江進出を論じ、三河を中心にはあるが本書の冒頭として東海道の情勢を俯瞰した叙述がなされる。鎌倉末期の三河についても北条氏所領が拡大していることや、北条氏所領が足利氏・吉良氏に継承されるのかどうか、言及が欲しかった。また鎌倉・京都での吉良

氏の活動の言及がないが、吉良氏には都市領主としての性格はないのかどうか。また足利氏執事(仁木・斯波・細川)と三河のつながりを指摘されるが、具体的なあり方が不明であった。

今川氏の叙述(四)は、範国以後の今川氏が駿河・遠江守護というだけでなく、在京幕府軍の一員として畿内でも出陣し、在京の有力幕閣であったことが論じられる。また侍所頭人・引付頭人となつた貞世(了俊)を家嫡とする。

山陰地方の守護今川頼貞にも言及し、今川氏の全盛時代を南北朝期に見出す。これまでの今川氏研究で見落とされてきた新たな提起が、東海地域を超えて様々に述べられている。

今川氏の在京的性格は室町期にも続き、今川氏を在国守護とのみ規定はできなくなった。また、今川氏の動向をみても室町前期までは守護はなお遷替の職である。その状況のなかで守護の地域支配を考える上では、守護職とは別に国内所領を支配する地域領主の側面に言及が欲しかった。そのために

は信憑性に問題がある「難太平記」だけでなく、古文書史料にもとづいて南北朝期今川氏の展開を見直す必要がある。

五 東海地域と顕密仏教―宝院流の展開を中心に―小池勝也氏執筆分担

猿投神社は陶器生産としても有名な地であるので、陶器生産と宗教の関連も考察してほしかった。

ただ、この猿投神社と前掲した真徳等は比較的近く、京都・鎌倉の中間点でもある。やはり東西交流の活発化によってもたらされたものだろう。

天台・真言両宗は、東海地域さらには静岡県下でも、元は天台・真言寺院だったものが、新仏教寺院に改宗していったものが多い。

六 東海地域と禪宗

斎藤夏彦氏執筆分担

地方寺院の創建・経営には在地有力者(檀越)の支援が必要不可欠であった。先に挙げた寺院でいうと、実相寺の吉良氏、吉良氏は遠江国尊治寺の檀越でもあった。方広寺の奥山氏、清見寺は興津氏であつたか。平田寺は相良氏であつたか。なぜか聖武天皇御宇を所蔵している。また土岐氏の庇護の元閑居した万里集九は、美濃の地で梅花無常蔵を編み

太田道灌の招きによつて、江戸まで旅をしている。その宿泊地も禪宗寺院であり、普濟寺や清見寺に泊まっている。

第 二 卷 第 一 章 第 一 節 第 一 項

第 二 卷 を 概 観 し て、今までの知識である、天台・真言宗・鎌倉仏教・静岡県は特に禪宗といった、図式が成り立たないことがよく分かった。現在でも現世利益で繁昌している岩水寺や小国神社など真言宗寺院が多い。神仏習合の中で、各階層の人々は何を求めていたかを史料からきちんと位置付ける必要を感じた。

第 二 卷

一 駿河・遠江の守護・奉公衆・国人
杉山一弥氏執筆担当

これは、家永徳嗣氏の説くように、東嘉府軍（細川政元）に命じられた、奉公衆の横地・勝田両氏によつて塩田坂（菊川市）で討たれた。杉山氏が説くように、南北朝期に見られた今川氏の守護代（高木氏・長瀬氏など）は見えなくなっていく。だからと言って、決して守護権力が強かったわけではないと思われる。康正二年（一四五〇）に起きた引聞市土倉一揆にしても、鎌倉府討滅のために、斯波（浜川）義鏡が、遠江を軍兵の草刈り場としたために、兵糧米の値が吊り上がったからであり、混乱を極めた。斯波

氏は、幕府の先兵として関東を攻めるというポーズを示しながら、結局行わなかったため、斯波氏の管領としての権威も地に落ちた。杉山氏は、奉公衆として横地・勝間田氏を説明しつつも、別の頁では有力国人として、今川氏の遠江侵入に對し、あくまで私的に反発したとしている。家永徳嗣氏の、応仁・文明の乱における東嘉府軍内の対立として、管領細川政元に命じられて今川義忠を討つたという説を考慮していない。評価すべきは一色氏の海上支配であり、渥美郡の分郡守護を得たのみならず、知多平島、伊勢と太平洋岸及び日本海までも触手を延ばしたことを実証している。尾張守護として今川仲秋と法珍の名が見える。わずかな数年の補任ではあったが、なぜそこに今川が入ったかの考察がない。

五 東海的神祇と信仰

山田雄司氏執筆担当

現在の白山神社は、岐阜県が最も多く五・五社を数え、静岡県は五・五社、全国で一番目に多い数である（森田執筆『福田町史』）。特に遠江には多く見られる。近世になると三山禪定といって、白山・立山・富士の巡歴も行われた。富士信仰は、最も静岡県及び山梨県に關係が深い。修行として富士登山も行わ

れ、中世では、足利義満・義教の富士遊覧が注目される。都の人にとつて、富士山は憧れの場所だったのである。一般でも万里集九は、関東に向かう一つの目的は富士山を見ることであり、富士山を初めて見た集九は、かぶつた笠を投げ打って驚いている（『樺花無賞蔵』・森田執筆『寛政町史』）。

第 二 卷 の 小 括

ここで、問題とするのは、杉山氏の今川氏に対する評価である。すなわち、今川範以以降、守護在国が命じられ、それによつて、家臣団を強化したことが戦国大名化に進んだということである。果たしてそうであつたか。

今川氏親は、善后死

後風前の灯だったのであり、伊勢盛時（後の北条早雲）がいなかったら、とつくに謀殺されていたのである。森田氏は、伊勢盛時の京都情報と権力の低下は、はたしい幕府の有様を見て、幕府に従うのではなく、幕府を利用する方に方針転換がなされ

れたから戦国大名化できたのではないかと見る。

【例会案内】

☆七月例会

一、日時 七月二十六日（土）

午後二時

二、会場 静岡県教育会館D会議室
三、報告名及び報告者名

「安政東海地震後の今切渡海路の復旧について（仮）」

岡崎佐比氏東洋大学大学院博士後期課程「事務局より」

例年通り、午後一時より幹事会を行います。会長並びに顧問・幹事はご出席願います。また欠席される方は必ず連絡下さい。

静岡県地域史研究会報

第261号

2025年7月5日発行

静岡県地域史研究会

<https://www.shizuoka-chiikishi.jp/>

<shizuokachiikishikenkyukai@gmail.com>

会長 小和田哲男

事務局長 森田香司 (090) 7023-0733

会計担当 北村 啓 (090) 4230-6530

〔会費納入先〕

北村啓気付

郵便振替口座 00880-3-63062

年会費 3000円

